

# 2007年の「話題の人」

## Newsmaker of the Year

Nature Vol. 450 (1127) / 20/27 December 2007

**Nature** は、インドの工学者にして経済学者、そして気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の議長であるラジェンドラ・パチャウリを第1回『今年のお題の人 (Newsmaker of the Year)』に選出した。



IPCCのラジェンドラ・パチャウリ議長

MARLENE AWAD / MAXPPP / NEWS.COM

科学はおそらく、人間の主要な営みの中で「人格」に依拠する要素が最も少ない領域である。最初の発見者が誰であっても、誰によって記載されても、誰によって予想されても、科学的な事実は同じである。

同時に、ある科学者がどのような研究を行うかは、その科学者がどのような人物で、どのようにして協力し合い、どんな人を好み、どんな人を嫌い、どのような世界観をもち、どの程度の根拠があり、どのような欠点があるかによって決まってくる。歴史と同様、科学を作るのは個人である。とはいえどちらも、名を残す人物の陰には忘れられていく人々がいるのだが。

科学が人々の目に触れるときにも、その顔となる人物がいる。科学は、人間の活動を通してニュースになる。*Nature* がこれから毎年、科学における役割により全世界に多大な影響を与えた人物を「話題の人」として年末に選出しようと考えたのも、そのためである。

「話題の人」は、褒め称えるべき人物であるとは限らない。もっと前から始まっていたら、論文のねつ造が問題になった幹細胞研究者の黄禹錫<sup>フンウソク</sup>など、不名誉なニュースになった人物が選出されていたかもしれない。また将来は、クローン人間、道を誤った政治家、バイオテロリストなどが「話題の人」に選出される可能性もある。こうした人々も、ニュースや科学そのものに重大な影響を及ぼす可能性があり、独自の分析に値するからである。

しかし、2007年の「話題の人」が科学に成した貢献は、無条件に称賛することができる。ラジェンドラ・パチャウリの強みは、自分の得意分野（工学と経済学という、開発にかかわる分野）の研究所を設立し、組織を作った点にある。この分野で彼が取めた成功は、冷静でありながら極めて精神的な性格がもたらしたものである。パチャウリはこの20年間で、デリーに本拠地を置くエネルギー資源研究所 (TERI) を設立し、これを世界中にオフィスがあり、数百人のスタッフを擁する組織へと成長させた。5年前からは、気候変動に関する政府間パネル (IPCC) という大規模な共同機関の議長も務めている。

とはいえ、「話題の人」を選出する趣旨は、スターへの心酔を表明することにあるのではない。科学研究の核にあるの

は、人格ではなく発見である。*Nature* の姉妹誌である *Nature Methods* が「今年的手法」の発表を始めたのはそのためである。ちなみに、第1回の「今年的手法」として選ばれたのは次世代超高速DNAシーケンシングである。

パチャウリにとっての2007年は、IPCCがノーベル平和賞を共同受賞したことで、記念すべき年になった。その締めくくりとして、12月初旬に開催された国連気候変動バリ会議でも、まずまずの成功を取めることができた。各国はここで、2012年に期限切れとなる京都議定書に代わる協定の枠組み設定に向けて前進することができた。

気候変動の脅威から弱者を保護するためには、我々全員の行動を変えていかなければならない。そのためには、個人の行動を変えるだけでなく、政治的な取り組みも必要である。炭素を地中に埋めて、原子力発電や潮力発電により寝室の照明を灯すためには、政府による直接および間接的な「お膳立て」が必要である。炭素を排出する過程に経済的コストをかけることは前者の例であり、基礎研究や技術開発を促進することは後者の例である。バリ会議では、我々の前途にある政治的議論を先取りして味わってみたにすぎない。その先には、気候変動を緩和するために個人が引き受けなければならない厳しい現実が待っている。その負担は、喜んで引き受けようとする人にも、しぶしぶ引き受ける人にも、同じようにのしかかる。

けれども、集団での取り組みには、前向きで、精神を高揚させる面もある。IPCCは、その好例である。IPCCのメンバーは、新しい研究ができたはずの時間を世界全体のために犠牲にしてきた。彼らの果てしない会合と議論、知的衝突、暖かい相互理解からは、一般の人々が最大の関心を寄せている科学的問題に関して、他に類例を見ないほど信頼度の高い知識のカatalog (および、残された謎についての権威ある査定) が得られた。数百人の著者が誇りに思い、世界中の国々がある程度の信頼を寄せるようなものを作り上げるのは、並大抵のことではない。IPCCの総力をあげた努力は数十年にわたるものである。しかし、IPCCがこれまでで最大の成果を上げたときに議長地位にあった人物はラジェンドラ・パチャウリである。ゆえに我々は彼に敬意を表するのだ。 ■